

井上円了の博士論文『仏教哲学系統論』について

井上家から寄贈された原稿をめぐって

三浦節夫

MIURA SEISUO

一 文学博士の取得の過程

井上円了の文学博士の取得については、すでに山内四郎氏の「井上円了の学位に就いて」（『井上円了の思想と行動』東洋大学、昭和六十二年、三四九〜三五七頁）という実証的な研究がある。この論文で明らかにされた円了の学位の取得の過程を引用しておこう（カッコ内は山内氏による注記、「」は筆者のよる以下の決議録の日付の注記である）。

円了の文学博士の学位は、論文審査を経て、その授与が決定されたものであり、審査機関は帝国大学文科大学の教授会である。山内氏はその『文科大学決議録』によって、つぎのような過程で審査が行われたことを解明した。

〔明治二十八年七月十一日〕

出席者、外山（正一）学長、坪井（九馬三）、物集（高見）、中島（力造）、元良（勇次郎）、三上（参次、助教）、上田（萬年）、高津（鋏次郎、助教）

一、井上円了ヨリ学位稟請ノ件ハ調査委員トシテ井上（哲次郎）、坪井、村上（專精）、ノ三氏ヲ選定シタリ次イ
テ論文ヲ右三者ニ附託シタリ

〔割注〕但シ坪井教授調査ニ着手スベキニ付論文ヲ全教授ニ送附シタリ

〔明治二十九年四月十日〕

出席者、外山学長、黒川（真頼）、上田、中島、物見、元良、島田（重礼）、村上講師

一、井上円了提出ノ論文審査報告書、学長朗読アリ村上講師一、二語簡單ニ説明セラルル別ニ異議起ラザリシモ報告書余り簡單ニ付尚少シ事実ヲ摘記シタル文字ヲ挿入スルコト可ナラントノ事ニテ此レハ村上氏担当シ他委員ニ相談スルコトトナセリ

〔明治二十九年五月六日〕

出席者、外山学長、上田、坪井、黒川、元良、三上、田中（義成、助教授）

一、井上円了氏学位申請論文報告アリタルモ結局次点□□文字ニ付種々説アリタルモ結局其俛ニテ可決シタリ

〔明治二十九年五月十三日〕

出席者、外山、上田、物見、黒川、元良、三上、田中、高津

一、井上円了氏学位申請ノ論文調査報告書ヲ全審査委員ヨリ差出サレタルニ由リ之レヲ審議シ報告ヲ可決シタリ

つぎに、山内氏は帝国大学の「評議会記録」議題録をつぎのように確認した。

〔明治二十九年五月十九日〕

議題学位ノ件（井上円了）可決

そして、明治二十九年六月九日付『官報』第三千八百八十二号、○学事○学位授与の項に、つぎの文章が掲載された。

文部大臣ハ明治二十年勅令第十三号学位令第三条ニ依リ左記ノ者ニ文学博士ノ学位ヲ授与セリ其学位記ハ次ノ如シ（文部省）

新潟県平民

井上 円了

明治二十年勅令第十三号学位令第三条ニ依リ茲ニ文学博士ノ学位ヲ授ク

このような審査の過程を経て、明治二十九年六月八日に、円了は文学博士の学位を取得した。円了は十五番目の文学博士となったが、その過程を説明した山内氏は、「それでは、井上円了の学位論文の論題名は何かという事が問題になる。実物が井上家に伝えられていないし、東京大学のものは関東の震災によって焼失したとの事である。」という問題を指摘している。同氏はさまざまな関係資料を検討し、論題名の問題を明らかにしようと

したが、最終的に「論題は疑問もあるが、おそらく『仏教哲学系統論』である。」と結論付けている。

二 『仏教哲学系統論』について

円了の文学博士は論文審査を経て授与されたものであるが、このように実物で論題名が確認できていないという問題があった。ところが、近年になって井上家からつぎに紹介するまとまった原稿が寄贈された。この原稿の論題は、「印度哲学論文 仏教哲学系統論 井上圓了稿」となっている。寄贈された原稿は、和紙に書かれていて、二種類に分けられる。

第一は墨で清書された原稿で、「印度哲学論文 仏教哲学系統論 井上圓了稿」と題していて、清書は円了の自筆ではない。その清書原稿に、円了が朱や青で加筆している。和紙はタテが二八・二センチ、ヨコが三九・七センチである。一枚に二〇行、一行に三〇字で書かれている。その枚数であるが、三六二枚に、四〇〇字で五四五枚に達している。

第二は円了の自筆原稿である。墨や朱で書かれている。この原稿も和紙であるが、第一の原稿とは大きさが異なる。タテが二四・六センチ、ヨコが三四・四センチである。一枚に二〇行、一行に約二四字で書かれている。その枚数は一〇〇枚である。

第一の原稿は、後に朱筆で題名を「日本仏教系統論」に直している。清書原稿への加筆・削除の指定はこの変更にもなうものと考えられる。そう考えると、第二の原稿はこの変更のものであろうか。しかし、これらの原稿は円了の著作として刊行されていない。

ともあれ、井上家から寄贈された原稿は、今後の研究課題を提起するものである。参考のために、第一の原稿

と第二の原稿の目次をつぎに紹介しておこう（原文の目次には順番が異なるところなどがあるが、原文のままにした）。

井上家から寄贈された原稿を、今回、写真版で公開するが、紙幅の都合で冒頭の一部分とした。タイトルは「仏教哲学系統論」とした。なお、円了の同論文に研究関心をもつ方などのために、全文をDVDにしたので、閲覧はそちらを利用していただきたい。

第一卷 緒論

第一篇 総説

第一章 開端

第二章 研究ノ方法

第三章 仏教ノ発達

第四章 日本ノ仏教

第五章 仏教ノ性質

第二篇 哲学略説

第六章 哲学ノ定義

第七章 事物ノ分類

第八章 教学ノ分類

第九章 学問ノ分類

第十章 哲学ノ分類

第十一章 哲学ノ応用

第十二章 純正哲学分類第一

第十三章 純正哲学分類第二

第三篇 宗教略説

第十四章 宗教ノ定義

第十五章 宗教分類第一

第十六章 宗教分類第二

第十七章 宗教学ノ定義

第十八章 宗教ト哲学ノ関係

第四篇 仏教総論

第十九章 仏教全体分類

第二十章 理論宗ト實際宗トノ關係

第二十四章 仏陀ト衆生トノ關係

第二十五章 哲学門ト宗教學トノ關係

第二十三章 真如ト万法トノ關係

第二十五章 小乘ト大乘トノ關係

第二卷 本論第一 理論宗第一 哲学門

第一篇 総説

第二十六章 仏教ノ有空中三宗

第二十七章 仏教哲学ノ性質

第二十八章 哲学門ノ一理

第二十九章 平等ト差別トノ關係

第三十章 仏教ノ論理

第三十一章 各宗ノ哲理

第三十二章 仏教ノ理脈

第二篇 体象实在論第一 総説

第三十三章 实在論ノ分脈

第三十四章 各宗ノ論目

第三十五章 外道諸宗

第三十六章 小乘諸部

第三十七章 俱舍宗述意

第三十八章 俱舍宗万法論第一 世界論

第三十九章 俱舍宗万法論第二 法体論

第四十章 俱舍宗識心論

第四十一章 俱舍宗無為論

第四十二章 俱舍宗結意

第四十三章 成実宗大意

第一篇 体象实在論第二 空宗論

第四十四章 法相宗述意

第四十五章 法相宗万法論

第四十六章 法相宗識心論第一 識心ノ種類

第四十七章 法相宗識心論第二 識心作用

第四十八章 法相宗無為論

第四十九章 法相宗教相論

第五十章 法相宗有空論

- 第五十一章 法相宗中道論
- 第五十二章 法相宗結意
- 第五十三章 三論宗述意
- 第五十四章 三論宗教相論
- 第五十五章 三論宗有空論
- 第五十六章 三論宗中道論
- 第五十七章 三論宗結意
- 第三篇 体象実在論第三 中宗論
- 第五十八章 起信論述意
- 第五十九章 起信論中道論
- 第六十章 起信論結意
- 第六十章 天台宗述意
- 第六十一章 天台宗教相論
- 第六十二章 天台宗有空論
- 第六十三章 天台宗中道論
- 第六十四章 天台宗結意
- 第六十五章 華嚴宗述意
- 第六十六章 華嚴宗教相論

- 第六十七章 華嚴宗有空論
- 第六十八章 華嚴宗中道論
- 第六十九章 華嚴宗結意
- 第七十章 真言宗述意
- 第七十一章 真言宗教相論
- 第七十二章 真言宗有空論
- 第七十三章 真言宗中道論
- 第七十四章 真言宗結意
- 第四篇 結論
- 第七十五章 全教ノ系統
- 第七十六章 全系ノ中心
- 第七十七章 全論ノ性質
- 第三卷 本論第二 理論宗第二 哲学門(続)
- 第一篇 体象關係論
- 第七十八章 体象關係論第一 体象關係ノ状態述意
- 第七十九章 有空宗ノ状態論
- 第八十章 中道宗ノ状態論

第八十一章 体象関係ノ状態結意

第八十二章 体象関係論第二 体象関係ノ理由述

意

第八十三章 存立開発ノ二論派

第八十四章 存立論第一 俱舍宗ノ説明

第八十五章 存立論第二 天台宗説明

第八十六章 開発論第一 法相宗ノ説明

第八十七章 開発論第二 起信論ノ説明

第八十八章 開発論第三 華嚴宗ノ説明

第八十九章 体象関係ノ理由結意

第九十章 体象関係論ノ二大疑問

第九十一章 第一疑問ノ弁解

第九十二章 第二疑問ノ弁解

第九十三章 疑問弁解ノ結意

第九十四章 余難二問

第二篇 体象規則論

第九十五章 体象規則論述意

第九十六章 仏教ノ因果ト他教他学ノ因果トノ関

係

第九十七章 有宗ノ因果論第一 俱舍宗因果論

第九十八章 有宗ノ因果論第一 成実宗因果論

第九十九章 空宗ノ因果論

第一百章 中宗ノ因果論

第十一章 因果論結意

第十二章 哲学論総論

第四卷 理論宗第三 宗教門

第一篇 総説

第一百三章 宗教門ノ論題

第一百四章 仏陀ノ性質

第一百五章 衆生ノ性質

第一百六章 迷界ノ種類

第一百七章 悟界ノ種類

第一百八章 宗教門ノ分系

第一百九章 各系ノ論意

第二篇 仏人実在論

第一百十章 実在論述意

第百十一章 有論ノ実在論

第百十二章 空宗ノ実在論第一 衆生論

第百十三章 空宗ノ実在論第二 仏陀論

第百十四章 中宗ノ実在論第一 天台宗論

第百十五章 中宗ノ実在論第二 華嚴宗論

第百十六章 中宗ノ実在論第三 真言宗論

第百十七章 実在論結意

第三篇 仏人関係論

第百十八章 関係論述意

第百十九章 染浄論

第百二十章 善悪論

第百二十一章 苦楽論

第百二十二章 空宗ノ関係論

第百二十三章 中宗ノ関係論第一 起信論

第百二十四章 中宗ノ関係論第二 天台論

第百二十五章 関係論結意

第四篇 仏人規則論

第百二十六章 規則論述意

第百二十七章 善悪因果ノ規則

第百二十八章 戒律論

第百二十九章 禪定論

第百三十章 階位論

第百三十一章 有宗ノ規則論

第百三十二章 空宗ノ規則論第一 法相宗論

第百三十三章 空宗ノ関係論第二 三論宗

第百三十四章 中宗ノ規則論第一 天台宗論

第百三十五章 中宗ノ規則論第二 華嚴宗論

第百三十六章 中宗ノ規則論第三 真言宗論

第百三十七章 規則論結意

第百三十八章 理論宗結論第一 仏教理学比較論

第百三十九章 理論宗結論第二 仏教卜理学トノ

異同

第百四十章 理論宗結論第三 遺伝説ト業因説ト

ノ比較

第百四十一章 理論宗結論第四 仏教理学比較論

結意

第五卷 本論第四 實際宗

第一篇 實際宗第一 意宗論

第一百四十二章 實際宗総論

第一百四十三章 實際宗ノ起因

第一百四十四章 實際宗ノ革新

第一百四十五章 智情意三宗ノ異同

第一百四十六章 意宗述意

第一百四十七章 意宗哲学門第一 不立文字論

第一百四十八章 意宗哲学門第二 見性悟道論

第一百四十九章 意宗宗教門第一 仏人実在論

第一百五十章 意宗宗教門第二 仏人關係論

第一百五十一章 意宗宗教門第三 仏人規則論

第一百五十二章 意宗結意

第二篇 實際宗第二 智宗論

第一百五十三章 智宗述意

第一百五十四章 智宗哲学門第一 教相論

第一百五十五章 智宗哲学門第二 秘法論

第一百五十六章 智宗宗教門第一 仏人実在論

第一百五十七章 智宗宗教門第二 仏人關係論

第一百五十八章 智宗宗教門第三 仏人規則論

第一百五十九章 智宗結意

第三篇 實際宗第三 情宗論第一

第一百六十章 情宗述意

第一百六十一章 情宗ノ種類

第一百六十二章 情宗哲学門第一 融通念仏宗

第一百六十三章 情宗哲学門第二 浄土宗教相論

第一百六十四章 情宗哲学門第三 浄土宗時機論

第一百六十五章 情宗哲学門第四 時宗

第一百六十六章 情宗哲学門第五 真宗教相論

第一百六十七章 情宗哲学門第六 真宗真俗論

第四篇 實際宗第四 情宗論第二

第一百六十八章 情宗宗教門第一 融通念仏宗

第一百六十九章 情宗宗教門第二 浄土宗仏人実在論

論

第一百七十章 情宗宗教門第三 浄土宗仏人關係論

第七十一章 情宗宗教門第四 浄土宗仏人規則

論

第七十二章 情宗宗教門第五 時宗

第七十三章 情宗宗教門第六 真宗仏人実在論

第七十四章 情宗宗教門第七 真宗仏人關係論

第七十五章 情宗宗教門第八 真宗仏人規則論

第七十六章 情宗結意第一 浄土諸宗ノ比較

第七十七章 情宗結意第二 聖道門ト浄土門トノ比較

ノ比較

第七十八章 情宗結意第三 天台ノ平等論ト浄土ノ差別論トノ異同

土ノ差別論トノ異同

第七十九章 情宗結意第四 智力的ト感情的トノ關係

ノ關係

第五編 結論

第八十章 實際宗結論第一 諸宗ノ比較

第八十一章 實際宗結論第二 諸宗ノ心理

第八十二章 實際宗結論第三 實際宗ノ唯心論

第八十三章 實際宗結論第四 實際宗ノ一元論

第八十四章 結論

第八十五章 仏教唯心論ノ説明

第八十六章 成仏論ノ説明

第三十四章 外道諸意

第三章 數論勝論大意

第三十八章 小乘諸部

第三章 俱舍宗大意

第三十九章 俱舍宗述意

第四十章 俱舍宗客觀論第一 物質論一

第四十一章 俱舍宗客觀論第一 (統) 物質論二

第四十二章 俱舍宗客觀論第一 (統) 世界論一

第四十三章 俱舍宗客觀論第一 (統) 世界論二

第四十四章 俱舍宗客觀論第二 世界論三

第四十五章 俱舍宗客觀論第二 世界論四

第四十六章 俱舍宗客觀論第三 人類論一

第四十七章 俱舍宗主觀論第一 心象論一

第四十八章 俱舍宗主觀論第一 心象論二

- 第四十九章 俱舍宗主觀論第二 心体論
- 第五十章 俱舍宗主觀論第二 法体論
- 第五十一章 俱舍宗本体論第一 無為論
- 第五十二章 俱舍宗結意
- 第五十五章 法相宗客觀論第一 物質論
- 第五十六章 法相宗客觀論第二 人類論
- 第五十七章 法相宗主觀論第一 心象論
- 第五十八章 法相宗主觀論第一 心体論一
- 第五十九章 法相宗主觀論第一 心体論二
- 第六十章 法相宗主觀論第一 心体論三
- 第六十一章 法相宗主觀論第二 心体論四
- 第八十七章 十界互具論
- 第八十八章 一念三千論
- 第八十九章 一心三諦論
- 第九十二章 教相論（五教論及十宗論）
- 第九十三章 原稿
- 第九十四章

- 第九十五章 中道論（十玄論及□相論）
- 第九十六章 教相論
- 第九十九章 二教 十住心論
- 第一百章
- 第一百零一章 真言宗結意

井上円了

仏教哲学系統論(抄録)



印度哲學論
佛敎哲學系統論

日本佛敎

井上圓了稿

第一卷 緒論

○第一篇 總說

第一章 開端

又ルモノアリ

仰キテ天文ヲ觀レハ森然トシテ羅列目俯シテ地理ヲ察スレハ雜然トシテ流形スルモノアリテ千態万狀奇變妙化隱見出沒冥ニ端倪スベカラズト雖モ其間ニ條理ノ井然トシテ存シ規律ノ秩然トシテ行ハル、

ラ見ル一根ノ草モ偶然ニ生スルコトナク一片ノ雲モ卒爾ニ滅スルコ
 トナク其来ルモ專者ニモ共ニ必ズ一定ノ規則ニ從ハガルハナシ果シ
 學術ノ世ニ起リシ所以ニシテ物理化学天文地質動物植物等ノ諸學ハ
 皆此難然タル千類万種ノ裏面ニ貫通セル一大理法ヲ開闢シ来リテ各
 一学科ヲ成スニ至ヒリ此ノ如キハ獨リ物質世界ノ事情ナルノミナラ
 ス精神世界ノ状態モ亦然リ其思想ノ出沒变化ハ冥ニ偶然ニ起滅スル
 カ如キモ必ズ前想後念ノ間ニ一貫セル連鎖アリテセテ接続セナルハ
 ナシ人ノ幼時ヨリ成長ノ際漸ク發達シ来レル智情意モ亦皆一定ノ理
 法ニ從フコト宛モ草木ノ生物一般ノ規律ニ從ヒ種子ヨリ發育シテ漸
 ク枝葉ヲ分出シ遂ニ花実ヲ結成スルニ異ナラズ蓋シライカニツ氏カ

必ズ由テ来ル原因アリ 其發達モ必ズ由テ去ル事情アリテシテ必然

單 生ズ 蓋シ

明

1.

思想發達ノ理ニホキ

道理、連續、等差ノ三大則ヲ以テ哲学ノ原理ト定メタルモ此意ノ外ナク

ハイゼン氏カ均同普及制限ノ三美法ヲ以テ論理ノ原則ト定メタルモ亦以テ之ヲ外ナク

ガレバシ是レ獨リ一人ノ思想ノ規則ナルノミナラス太古哲人ヨリ今

日マテ次第ニ發達シ来レル思想ハ皆一定ノ規律ヲ履ヒ決シテ其

ニ出ツルコトナシ往古々々レズ氏カ萬物ノ本體ヲ水ナリト想定シテ

以来哲学者陸續ヲ接シテ輩出シ輿論百端右折左曲シテ進行シ来レモ

ノ亦皆一條ノ理脈ヲ追ヒ思想發達ノ規則ニ從ハガレハナシ是ヲ以テ

ハイゼン氏ノ如キハ哲学史即チ哲学ナリト論ズルニ至レリ蓋シ哲学

史ハ哲学思想ノ古代ヨリ順序系統ヲ追テ漸次ニ發達シ来レル状態ヲ

開示セルモノナルニヨル以上述ワレ所之ヲ要スルニ雜然タル物質界

モ混然タル思想界モ共ニ秩序規律ニ從テ開發進化セルモノナレハ其

モ混然タル思想界モ共ニ秩序規律ニ從テ開發進化セルモノナレハ其

中ニ亦オノツカラ前後ヲ一貫セル理法系統ノ存スルヤ疑フベカラス
ト云フニアリ

抑東洋諸邦中哲学思想ノ最モ発達シタルモノヲ印度トス孰中其説ノ
最モ多岐ニ分レ錯雜ヲ極メタルモノヲ佛教トス其教ハ今ヲ距ルコト
凡ソ三千年釋迦^前佛陀カ一旦菩提樹下ニ於テ廓然トシテ大悟セラレシ
時ニ其源ヲ發シ一時五印度中ニ流布シ漸ク支那三韓ニ傳播シ遂ニ本
邦ニ入りテ殊ニ隆盛ヲ極ム其間一大源流分レテ數宗數派トナリ異論
從テ競起シ到底統一スベカラサル勢ナリ然レドモ是レ全ク哲学思想
ノ發達ニシテ其流派ノ多岐多端ナルモ必ス其内部ニ一定ノ規律ヲ失
ハス一貫ノ理法ヲ有スルハ余カ信シテ疑ハガル所ナリ今若シ其理法

ヲ外面ニ開示スルヲ得ハ忽チ一大学科ノ組織ヲ見ルニ至ラン故ニ余
 ハ此難然タル佛教ニツイテ其裏面ニ含有セル秩然タル理脈ヲ開キ来
 古未教邦ニ傳レシハ諸宗諸派ノ所
 リテ佛教哲学ノ一大系統ヲ明瞭セントス是レ此ニ佛教系統論ヲ草ス
 ル所以ナリ

第二章 研究ノ方法

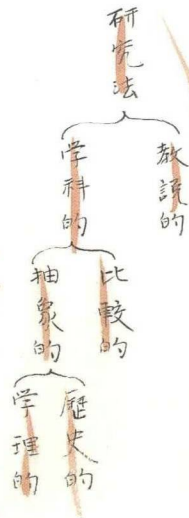
古來印度ニハ種々ノ学派争ヒ起リ甲論乙駁徒テ其説モ大ニ發達セリ
 今其種類ノ多キ佛書中ニ傳アル所ニ抑ルニ或ハ九十五種ノ外道アリ
 十六種或ハ邪道
 或ハ四種或ハ六種アリ等ト唱ヘリ
 ト説キ或ハ三十種ノ外道アリト云ヒ或ハ四種或ハ六種アリ等ト唱ヘリ
 然ルニ近來歐洲学者ハセテ分類シテ六大学派トナセリ斯ノ如ク印度
 ニハ數種ノ哲学派アリシト雖モ余ハ獨リ我邦ニ行ハルノ佛教ニツイ
 就キ

是レ余カ本論ニ
是ノ二字ヲ冠スル所以ナリ

テ其哲學系統ヲ論究セントス夫レ佛教、我邦ニ在ルヤ已ニ一千數百
年ヲ經過セリト昂モ古來唯、之ヲ一種ノ教説トシテ講究シタルノミ未
ク一科ノ學説トシテ研究シタルモノアラズ^{然ル}ニ余ハ其中ニ學科的研
究ノ^新道ヲ開カントス教説的講究ハ佛教ノ經論ヲ解釈シ釈迦ノ教説ヲ
繼承スルニ過キザルモ學科的研究ニアリテハ或ハ其教説ノ裏面ニ貫
通セル條理ヲ抽象シ或ハ他學科ノ考定セル學説ニ照合シ以テ一科ノ
學系ヲ關立ヒザレヲ得ズ故ニ後者ノ研究法ハ之ヲ前者ニ比^ステ大ニ
困難ヲ覺エト雖モ今日ニアリテ尤モ須要ノ研究法^{ハ後者ノ上ニ在ル}而シテ此研究
法ニ亦内外ノ二様アリテ分ル、ヲ見ル即チ其一ハ外部ヨリ比較的ニ
研究スルモノニシテ其二ハ内部ヨリ抽象的ニ研究スルモノ是ナリ又

佛教全躰ノ系統
ヲ組織シ其ノ關係ヲ論定ス

此數種ノ研究法中余ハ抽象的方法就中學理的方法ニヨリテ佛教全躰ノ系統ヲ論定シ以テ從來ノ教説的講究法ノ舊徑ヲ子改シテ學理的研
究法ノ新路ヲ開カントスルモノナリ



其抽象的研究法ニハ古來ヨリ發達シ來レル變遷ノ次第ヲ順序ヲ逐クテ講究スルモノト一教全部ニ貫通セル學理ヲ其性質ニ從ヒテ講究スルモノトノ二様アリ余ハ前者ヲ名ケテ歴史的的研究法ト云ヒ後者ヲ名ケテ學理的的研究法ト云フ

今假リニ

前後ノ

組織

呼

如シ

第三章 佛教の發達

世間佛教ヲ評論スルモノ或ハ大衆ハ釈迦ノ実説ニアラズシテ後人ノ
 附會セルモノナリト云ヒ或ハ日本ノ佛教ハ支那ニテ偽造セルモノナ
 リト云ヒ其甚シキハ釋迦ノ人ノ想像上小説的ニ構造シタルモノニシ
 テ其實此世ニ出現セシモノニアラズト云フニ至ル然レドモ此事々々ル
 ヤ別問題ニシテ余カ**組織**的**研究**ノ旨趣ヒヤラズ而シテ余カ**意圖**現
 今我邦ニ行ハルハ諸宗諸派ノ佛教ヲ分解總合シテ学科的系統ヲ論定
 セントスルニ外ナラズ蓋シ余ハ我邦ノ佛教ハ縱令印度ニ存スル佛教
 ト其教旨ヲ異ニスル所アルニモ拘ラズ三千年前釈迦所説ノ一大論カ
 廿七累子國ヲ歴内外ノ事情ニ從テ次第ニ發達シテ此ニ至レルモノト

思惟ス是レ即チ佛教ノ進化ナリ今我邦ニ傳フル所ニヨリテモ考フ
 ルニ其發達ニ兩様アリ即チ釈迦在世間ノ發達ト釈迦滅後今日ニ至ル
 マデノ發達是ナリ

釋迦ノ傳記ハ雜法記卷一乃至卷四、佛祖圖載卷四、釋迦傳記卷六、
 釋迦傳記卷一乃至卷四、佛祖圖載卷四、釋迦傳記卷六、

先ツ在世間ノ發達ヲ述ベンニ釈迦ハ十九出家三十成道ト稱シ其成道
 ノ時ヨリ八十歳入滅ノ時マデ五十年間ノ所説ヲ分チテ五時トス是レ

專ク天台宗ノ唱フル所ナリ其順序ハ第一時ニ華嚴經ヲ説キ第二時ニ

阿含經ヲ説キ第三時ニ方等經ヲ説キ第四時ニ般若經ヲ説キ第五時ニ

法華經及ヒ涅槃經ヲ説キタリトナス阿含ハ小乘教ナリ華嚴、般若、法華、

涅槃ハ大乘教ナリ方等ハ大小兩乘ニ通ス故ニ其發達ハ小ヨリ大ニ進

ニ淺ヨリ深ニ入ルノ順序ナリ然レニ初時ニ華嚴大乘ノ法ヲ説キシハ

其順序ニ合セガルカ如シト臣モ大衆深遠ノ教理ハ固ヨリ釈迦成道ノ

日ニ於テ既ニ其心中ニ具備セザル下カラズ而シテ其肩リノ儘本具ノ思想ヲ説キ

示シタルモノ即チ華嚴ナリ是ヨリ後其所説ノ説ノ漸小衆ヨリ大衆ニ及ボシタル

其順序恰モ草木ノ發育ノ如シ蓋シ其種侯ノ中ニハ枝葉ヲ開キ花侯

ヲ結ブ所以ノモノ盡ク初メヨリ存セリト臣モ其發育スルニ當リテハ

先ツ萌芽ヲ生シ次ニ莖幹ヲ生シ次ニ枝葉ヲ生スルナリ今華嚴ハ佛敎

ノ種侯ヲ説キタルモノニシテ其中ニハ大衆ノ花ヲ成ヌ所以ノモノ素

ヨリ存セリト臣モ直ニ花ヲ生セズ先ツ小衆ノ萌芽ヲ生シ次ニ大小兩

衆ニ通スル莖幹ヲ生シ般若ノ枝葉ヲ生シ終リニ極大衆ノ花ヲ成ニ成

ヲ結ブニ至ル法華ハ即チ大衆ノ花既ニ開キ終リテ種侯ヲ結ブカ如ク

初時華嚴ノ種實ニ歸合ス故ニ華嚴經ヲ以テ根本法輪トナシ法華經ヲ
以テ撰末歸本法輪トナヌ撰末歸本トハ阿含等ノ淺近ノ諸法ヲ撰收シ
テ實大業ノ根本ニ歸入スルヲ謂フ猶ホ草木ノ種實ヨリ出テ、又種實
ニ歸スルカ如シ是レ釈迦在世間ノ説法ノ發達ナリ

次ニ釈迦滅後ノ發達ヲ考フルニ亦此順序ニヨルヲ見ル蓋シ釈迦一代
ノ説法ハ種實ノ如ク其中ニハ因ヨリ大業ノ花モ實モ共ニ存セリト虽
モ最初ニ發生シタル部分ハ小業ノ萌芽ナリ即チ本邦傳フル所ニ據ル
ニ其滅後四百年間ハ小業獨リ盛ナリシト云フ其中初メ百年間ハ字依
未々分レス一味ノ法ヲ流傳ヒシモ百餘年ヲ經テ異論初メテ起リ上座
大衆ノ二部相分レ其後上座部ヨリ十一部ヲ分チ大衆部ヨリ九部ヲ出

シ佛滅後四百年ノ終ニハ本末合シテ二十種ノ流激ヲ生ゼリ五百年ノ

時異教ノ勢力隆ニシテ佛教大ニ衰微ノ兆ヲ現セリト云フ六百年ニ至

リ馬鳴始メテ大乘ヲ説キ七百年ニ至リ龍樹マ々大乘ヲ弘メ九百年ニ

至リ無著世親西師世ニ出テ、盛ニ大乘ノ諸論ヲ論述セシテ佛滅後千

年間ハ大乘ノ宗派未々起ラヌ千百年ニ至リ護法清辨西師ノ宗論アリ

千七百年ニ至リ戒賢智光西師ノ異説アリテ始メテ大乘ニ宗派ヲ分ツ

附

ニ至レリ其宗ハ法相三論ノ西宗ナリ自餘ノ諸宗ハ支那ニ入りテ分立
南無寄歸僧著一覽
世宗大契無過三宗一則中觀一或瑜伽中觀則俗有真空
世宗大契無過三宗一則中觀一或瑜伽中觀則俗有真空

論天台華嚴法相真言ノ十三宗起リ又日本ニアリテハ三論法相華嚴俱

舎成實律天台真言禪淨土等十餘宗ノ起リシヲ見ル而シテ現今存スル

7.
モノハ法相、華嚴、天台、真言、臨濟、曹洞、黃蘗、以上三宗ハ禪宗、淨土、真言、融通
爲佛、時宗、日蓮ノ十二宗ナリ若シ之ニ各宗所屬ノ分派ヲ合算スレハ總
シテ三十餘派アリト云フ此ノ如ク最初一味一途ノ宗教カ漸々世ノ移
リ國ノ異ナルニ從ヒテ多岐多端ニ分レタルハ抑^レ發達ニアラズシテ何
ソヤ余ハ之ヲ釋迦滅後ノ發達ト云フ

第四章 日本^(四)佛教

是ヨリ余カ正シク論述スル佛教哲學ハ日本現今ノ佛教ヲ總稱シテ其
中ニ貫通セル理脈ヲ開示スルニアリテ其佛教ハ前章ニ述ベシカ如ク
釋迦在世間ノ佛教ヨリ發達進化シ来リシ所以ハ其中ニ存スル條理ノ
前後ニ直リテ一貫セルヲ見テ知ルコトヲ得ベシ又今日ノ諸宗諸派ハ

其説ク折徃々氷炭相容レサルカ如キモノアリト居モ其裏面ニ貫通セ
 レ理眼ニ互リテハ決シテニ様相交スルモノアルニアラズ故ニ宗ハ我
 邦ニ古來傳フル所ノ諸宗諸派ヲ總括シテセテ一佛教トナシ以テ其間
 ニ貫通セシ字理ヲ論究セントスルナリ然リ而シテ現今我邦ニ存スル
 佛教ハ字旨上ニテハ十二宗アリ印4法相宗、華嚴宗、天台宗、真言宗、臨濟宗、曹
 洞宗、黃檗宗、淨土宗、真宗、融通念佛宗、時宗、日蓮宗是ニシテ皆大乗宗ナリ字
 間上ニアリテハ大乗ノ外ニ小乗ヲ兼學ス今ハ宗綱要ノ字名ヲ尋タレ
 ハ小乗宗中ニ俱舍宗、成實宗、律宗アリ大乗宗中ニ法相宗、三論宗、天台宗、
 華嚴宗、真言宗アリ此中ノ小乗宗ハ昔時皆我邦ニ傳ハリシモノ今時ハ存
 セズ唯字間上ニテ講究スルノミ今宗カ佛教トシテ論スル所ノモノハ

此八字十二宗ヲ總稱スルモノナレドモ余ハ之ヲ理論宗實際宗ノ二大
部門ニ分チ更ニ理論宗ヲ有空中ノ三宗ニ分チ實際宗ヲ智情意ノ三宗
ニ分チテ各宗ノ學理ヲ論明セントスル意ナリ

第五章 佛教の性質

凡ソ世上ニ佛教ノ性質ヲ論スルニ二派アリ一人ハ曰ク佛教ハ宗教ニ
シテ哲學ニアラズ一人ハ曰ク佛教ハ哲學ニシテ宗教ニアラズト云テ
以テ之ヲ觀ルニ此ニ論共ニ偏見及ルヲ免レズ然ラバ佛教ハ哲學ニモ
アラズ宗教ニモアラザルカ曰ク否、余以爲ラク

佛教ノ一半ハ哲學ニシテ一半ハ宗教ナリ(一)

左ニ圖ヲ掲ケテ其關係ヲ示スベシ

甲 國中ノ甲圖ハ哲学ニシテ

乙 圖ハ宗教ナリ而シテ丙

ハ即チ佛教ナリ

若シ其哲学ノ部分ニアリテ之ヲ觀レハ佛教ハ哲学ノ道理ヲ實際ニ應
用シタル宗教ナリト謂ハサレバカラス故ニ

唱ハ
哲学ハ其存在因ニシテ宗教ハ其結果ナリ(三)
ト定メサレテ得サルカ如キモ若シ宗教ノ部分ニアリテ之ヲ觀レバ

宗教ハ其目的ニシテ哲学ハ其方便ナリ(三)

ト謂ハサルベカラス第モ佛教中ニ存スル哲学ハ宗教ノ目的ヲ達スル
方便ニ外ナラサルコトヲ信ズ新迦ノ本意ハ固ヨリ之ヲ宗教トシテ説

示セシハ明カナリ其哲学ノ如キハ釋迦ノ教説中ニ其原形ヲ胚胎（七）

（八）ハ相違ナキ（九）モ其滅後數百年ヲ經テ漸ク大ニ發達シタリシハ亦疑ヲ容

レズ是レ恰モ孔子ノ教説中ニ哲理ヲ内包セシモ之ヲ外発スルニ至リ

タルハ宋朝以後ニアルカ如シ然ルニ余ハ佛（佛）教ヲ一科（科）トシテ論究スル（意）

ヲ論究（明）センニハ必ス其中ニ混同セル哲学ト宗教トノ両素ヲ分析シテ

此部分ハ哲学ニ属シ彼部分ハ宗教ニ属スルコトヲ（指定セヤ）ルベカラス

且ツ其宗教ニ属スル部分モモト哲学ノ原理ヲ應用セルモノニ外ナラ

カレハ其一半ハ矢張り学科トシテ講究セザルベカラズ故ニ余ハ各宗

各派ノ學説ヲ哲学門及ヒ宗教門ノニ大段ニ分テ其二者ニ貫通セル學

理ヲ開陳セントス是ヲ以テ第一ニ如何ナルモノヲ哲学トシ第二ニ如何ナルモノヲ宗教トスルカニ就テ説明ヲ與ヘサルベカラズ是ニ於テ第八先ツ左ノ二題ヲ掲ケテ其要旨ヲ略述ス

第一、哲学略説(即チ哲学ノ定義分類等ヲ略説ス)

第二、宗教略説(即チ^{宗教}哲学ノ定義分類等ヲ略説ス)

^{初ニ}此二題ヲ論述ス終リ次ニ佛教総論ニ論及スベシ

一行のり

○第二篇 哲学略説

第六章 哲学ノ定義

古來學者ノ哲学ヲ解スルヤ各一義ヲ取リ或ハ主觀的ニ定義ヲ下シ或

八客観的ニ義解ヲ与ヘ或ハ形而上ヨリ或ハ形而下ヨリ解釈ヲ付シテ
 未タ一定ノ説ナシト雖ヒ余カ之ヲ論スル本意ハ哲学ノ義解ヲ一定セ
 シトスルニアラスシテ渺茫タル哲学海中ニ佛教哲学ノ位置ヲ定メン
 トスルニ^{外ヲ}ハ其目的ニ適應セル解釈ヲ尋求スルヲ以テ足レリトス
 今古来ノ諸家ノ説ヲ参酌照合シテ其解釈ヲ考フルニ凡ソ左ノ二法ア
 ルカ如シ

第一ハ研究スベキ事物ノ上ニ考フル解釈

第二ハ研究スル方法ノ上ニ考フル解釈

其中余ハ第一ノ解釋法ニヨリテ哲学ノ性質ヲ論定セントスルニ先ツ
 宇宙間ニ存スル事物ノ^別類ヲ表示スルヲ要ス

第七章 事物分類

凡ソ宇宙間ニ現存スル事物ハ其數幾億萬ナルヲ知ラズト居モセラ合

類スレハ物ト心トノ二種ニ總括スル **ト**ヲ得ベシ余ハ此二者ヲ物質 **及**

心性ト稱ス或ハ客觀主觀ノ名稱ヲ用フルコトアリ或ハ客觀ノ一境ハ

之ヲ外界ト稱シ主觀ノ一域ハ之ヲ内界ト稱ス若シ物心ノ義解ラ下ヤ

ハ物質トハ我人眼ヲ開キテ其前ニ現スル有形ノ諸象ニシテ心性トハ

我人眼ヲ閉チテ其内ニ連ナル無形ノ諸想ナリト云フヨリ外ナシ今字

宙全界ヲ觀ルニ此物心両界ノ外ニ一事一物ナキヲ以テ宇宙為物心ニ

種ヨリ成 **ト**ト云フコトヲ得ベシ然ルニ若シ進テ其二者ノ本源實跡 **大**

ヲ考ヘ及ヒ其關係ヲ究ムルトキハ物心ノ外ニ神ノ現存ヲ想定セガル **實在**

客觀の境界

客觀の境界

簡短

吾人の知ルキ

一般

境

可見

う得ナルニ至ル即チ物ト心トハ全ク其性質ヲ異ニシ一ハ有形ニシテ
 延長性^{トシ}ナシ一ハ無形ニシテ思想性^{トスルモノセハ}ナシトハ物ヨリ心ヲ生スベカラズ又
 心ヨリ物ヲ造ルベカラズ故ニ此二者ハ如何ニシテ生出セシヤヲ知ル
 ニ苦シム又此二者ハ如何ニテ相和合^相シ相一致^トシテ作用ヲ呈スルカラ
 知ルベカラズ是ニ於テ物心ヲ造出シ且ツ此二者ヲ接合スル一様ノ別
 躰ヲ物心以外ニ立テザルヲ得ザルニ至ルヤヲ神若クハ天神ト云フ故
 ニ宇宙ハ物心神ノ三者ヨリ成立スル^{ヲ知ルハ}余ハ此三者ヲ假リニ事物世
 界ノ三元ト定ム是レ實ニ宇宙ノ三大元ナリ

第八章 数学的分類

事物世界ニハ既ニ物心神ノ三元アルトキハ其各元ヲ目的ノ躰トシテ

一摠
三以七八

論スルモノナカルヤカラズ即チ理学、哲学、宗教是ナリ理学ハ物ノ学ナリ
哲学ハ心ノ学ナリ宗教ハ神ノ教ナリ而シテ理学及ヒ哲学ハ事物ノ
中ニ存スル道理規則ヲ究明發見スルヲ目的トシ宗教ハ天神ノ定ムル
所ノ命令法律ヲ説明解説シテ之ヲ實地ニ應用スルヲ目的トス故ニ宗
教ハ学ニアラズシテ教ナリ以上理学、哲学、宗教ノ三者ヲ合シテ之ヲ教
学世界ノ三元トナス

余ハ又假リニ

此定義ニヨルトキハ哲学ハ學ニ心性ノ學ト云フベキノミ然ルニ心性
自體ヲ論究スルニ止マラス苟モ心性ノ關スル所、思想ノ及フ所皆哲学
ノ研究ニ属セザルハナシ是ニ於テカ先キニ事物ヲ合類シテ物心ノ二
種トナシタルヲ更ニ有形ト無形トノ二種トシ其無形中ニ有象、無象ノ

二種アルコトヲ述ベサルベカラズ且ツ之ト同時ニ事物ニ現象ト本體トノ別アルコトヲ知ラザルベカラズ例ハ心性モ無形ナリ天神モ形質ナキヲ以テ無形ナルモ二者ノ間ニオノツカラ其別アリテ天神ノ本體ノ如キハ無形中ノ無形ニシテ心性ノ如キハ無形中ノ有形ナリ即チ心性ハ其體形質ナキモ或ハ肉ニ動キ或ハ外ニ発シテ智力トナリ意志トナリ感情トナリテ其象ヲ示ス故ニ之ヲ有象トナス然ルニ天神ハ其象遠ク現象ノ外ニ超出セルヲ以テ之ヲ無象トナス故ニ事物ノ分析表左ノ如シ



之ヲ学科ニ配スルトキハ理学ハ有形ノ学、哲学ハ無形ノ学トナルベシ
 而シテ学教ハ学問ニアラザルモ若シ之ヲ学科的ニ研究スルトキハ哲
 学ノ一部分トナルベシ

第九章

学問の分類

既ニ無形中ニ有象ト無象トノ二種アル以上ハ哲学中ニモ亦此二種ナ
 カルベカラズ即チ心理学ノ如キハ現象アル心性ニツイテ研究スル学
 ナレバ余ハ之ヲ有象ノ学トシ純正哲学或ハ形而上哲学ハ無象ノ神祕
 ノ如キモノヲ論究スル学ナレバ之ヲ無象ノ学トス其表左ノ如シ



今余ハ神躰ハ無象ニシテ心性ハ有象ナリト述ベタレドモ心性ノ有象

ハ心性ノ本躰ニアラザルコトヲ知ラサルベカラズ其内ニ動キ外

ニ発スル智情意ノ三者ハ心性ノ現象ニシテ之ヲ心象ト稱ス心象ノ外

ニ其本深實躰トナルモノナカルベカラズ之ヲ心躰ト稱ス又物質ニモ

現象ト冥躰トノ別アリテ理学ニテ研究スル所ハ我感覺上ニ現スル色

聲香味觸ノ五種ノ現象ニ外ナラズ之ヲ物象ト稱ス既ニ物象アレハ亦

必ス其實躰ナカルベカラズ之ヲ物躰ト云フ此物躰ト心躰トハ共ニ不

可知的ニシテ無現象ナリ之ニ及シテ神躰ハモト無現象ナレドモ通俗

ノ一般ニ認メテ神躰トナスモノハ真ノ神躰ニアラズシテ物心ノ諸象

ヲ神躰ト上ニ被ラシメタル有意有作ノ**有象**神ナリ其甚シキニ至リテ

ハ神ハ形質ヲ有スルモノトナスアリ是ヲ以テ天神ニモ現象ト本體ト

ノ二者アルコトヲ知ラザルバカラズ其一ヲ神象ト云ヒ其二ヲ神體ト

云フ而シテ神體ノ名稱ハ通俗ノ神ト混同センコトヲ恐レ余ハ之

甚クハ理體ノ名稱ヲ用フルナリ其他純正哲學上ノ大問題ハ空間、時間、

勢力ノ三論ナレドモ此三者ハ寧ロ物心理三體ノ存在及ヒ關係ヨリ生

スル問題ニシテ物心理三體ヲ説明スル間ニオノツカラ説明シ得ラル

ベキナリ若シ此三者ヲ物心理ノ上ニ配合スレハ物質即チ物象ハ空間、

時間、勢力ノ三者ニ關係シテ存在スルモ心象ハ形質延長ヲ有セザルヲ

以テ唯時間、勢力ノ二者ニ關係シテ存在スルナリ而シテ物體、心體、理體

ニ至リテハ時間、空間ノ範圍外ニアリテ其二者ノ制限ヲ超越シタルモ

問題

條件

ニ付スルニ

ノナレハ獨リ勢力ニ關係シテ存在スルノ何トナレハ其躰即チ物心
爲有ノ開發進化ノ本源（真力）ハナリ且ツ其理躰ニ固有セル勢力ニ覺知

性ト不覺性トノ二種アリテ物躰ノ上ニ發スルモノハ不覺性ニシテ心

躰ノ上ニ發スルモノハ覺知性ナリ此等ノ問題ハ皆物躰心躰理躰ニ附

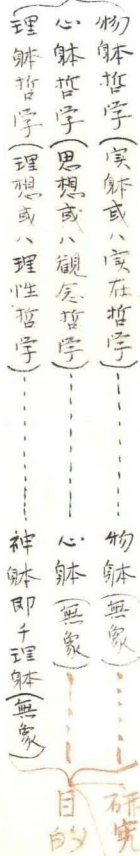
屬シテ起ルモノナレバ此ニ純正哲学ノ問題ハ物心理三躰ニ外ナラズ

ト斷言スルモノナリ又ヲ要スルニ純正哲学ノ研究ノ目的トスルモノ

ハ物躰心躰理躰ノ三者ナリト謂フバ故ニ純正哲学中ニ三種ノ哲学

ヲ分ツ其表左ノ如シ

純正哲学

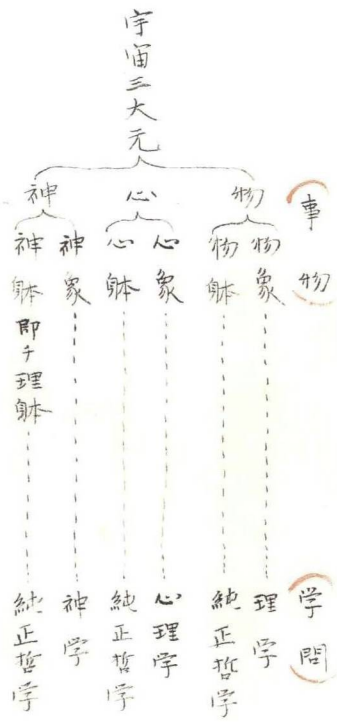


此ノ如ク純正哲学ニ分類スルハ決シテ平カ臆断ニアラス西洋諸家ニモ之ニ類シタル分類ヲナセルモノ固ヨリ一二ニアラス其中余ハ專ラヘীগレル氏ノ分類法ニヨレリ

更ニ先キニ掲ケタル宇宙ノ三大元ヲ躰象ノ二者ニ分テ諸学ニ配スル表ヲ示スコト左ノ如シ

事 物

学 問



此分類ハ後ニ佛敎哲學ヲ論述スルニ参照ヲ要スルヲ以テ此ニ示スルナリ

第十章 哲學(四)分類

右ノ表ニテモ知ル如ク心理学ハ心象ノ学ニシテ心象ノ学ニテ此

心象ノ應用ニツイテ論理、倫理等ノ諸学ナル、ナリ其理ヲ知ラント欲

セハ先ツ理論学ト應用学ト、二種アルコトヲ(示サ)ナルバカラズ理論

学トハ事物ノ性質作用ヲ論究シテ普遍一般ノ規則ヲ考定スル学ヲ云

ヒ應用学表シハ實用学トハ其規則ヲ實際ニ應用シテ人ヲ命令指示ス

ル学ヲ云フ故ニ自然ニ理論学ハ真理ヲ発見スルヲ目的トシ應用学ハ

世間ヲ利益スルヲ目的トスルノ別アリ今此ヲ(理学)トシテ考フルニ物

理学、純正化学、天文学等ハ外界ノ諸象高化ヲ究究シテ其普遍ノ規則ヲ

考定スルニ止マルヲ以テ所謂理論学ナリ然ルニ物理ノ規則ヲ應用シ

タルモノニ器械学アリ純正化学ノ規則ヲ應用シタルモノニ製造学アリ
天文学ノ規則ヲ應用シタルモノニ航海学アリ此諸学ハ理論学ニ於
テ考定ヒル規則ヲ实地ニ應用シテ人ヲ命令スルヲ以テ皆應用学ニ屬
ス次ニ之ヲ哲学ノ上ニ考フルニ心理学ハ心象ノ性質作用ヲ論究シテ
其一般ニ涉ル規則道理ヲ考定スルニ止マリ更ニ之ヲ實際ニ適用シテ
可否得失ヲ論スルコトナキヲ以テ理論学ニ屬ス之ニ反シテ論理倫理
等ノ諸学ハ應用学ナリ何トナレハ論理学ハ思想ノ法規推論ノ方式ヲ
設ケテ諸説諸論ノ可否得失ヲ論ジ人ヲシテ其一定ノ規則ニ従ハシメ
ントス倫理学ハ道徳上ノ行為學勸ノ規則標準ヲ定メテ其利害得失ヲ
論ジ人ヲシテ之ヲ遵守セシメントス是レ皆人ヲ命令指示スルモノナ

レハ應用學ト謂フベシ

次ニ心理学ト論理、倫理等ノ諸學トノ關係ヲ述ベテ其諸學ハ皆哲學中

ノ有象學ナルコトヲ示サイルベカラズ心理学ハ心象ノ學ナレドモ心

象ニハ感情、智力、意志ノ三種アリ此各種ノ性質作用ヲ考定スル理論學

ヲ心理学トシ此各種ノ應用ヲ説クモノヲ論理學、倫理學、表學ノ三科ト

ス即チ心象中意志ノ應用ヲ説クモノハ倫理學ナリ智力ノ應用ヲ示ス

モノハ論理學ナリ感情ノ應用ヲ論スルモノハ表學ナリ故ニ此三學ハ

心理学ノ理論ヲ實地ニ適合セシ應用學ナリ以上ノ諸學ハ哲學ヲ解シ

テ無形ノ學トスルトキハ皆哲學ニ屬スベキモ之ヲ純正哲學ニ比スル

ニ前者ハ有象ノ學ニシテ後者ハ無象ノ學ナルノ別アリ故ニ余ハ其一

主要性質ニシテ且タ此ハ倫理學ノ考定セルニ

ト知ルベシ

若シ

是レ實ニ精確ニ定義ニテラスト雖モ唯其